



花音ちゃんとお

尻遊び



お尻

遊び

花音ちゃん

DOJIN  
R18  
ADULT ONLY  
成人向け





ぎゅるるるらうらうらう

子犬の鳴くような音が、耳をくすぐった。

くりゅうらうらうん

それはじゃれつくような甘えるような、思わずわしやわしやと頭を撫でてあげたくなってしまう、庇護欲を誘う音だった。

「あ……っ……やつ……はあ……んんっ……」

それにあわせて、息も絶え絶えな吐息。

「だ……め……あつ……せんせ……やだあ……」

苦しげで、切なげで、ただどこどこか熱を持った声。

「はな……してえっ……んっ……」

今にも泣き出してしまうような大粒の涙を腫にためて。

「こ……あんっ……いちや……やだあ……」

上目遣いにすぎるように視線を向けて来て――

ぐりゅるるらうらうらう

「あ……っ……だめっ……ほんと……だめっ……」

びくんつと身体を震わせながら、ぎゅうつと目を閉じ

眉間に皺を寄せて――

「こらあ、だーめ、花音ちゃん。目を閉じちゃダメ」

「あ……んっ……だつて……あつ……だつて……」

「先生の目、ちゃんと見ててって言ったでしょ？」

「でもっ……あつ……でもお……」

ぎゅるるらうらうらう

「もう……あ……っ……でちゃう……んくっ……だしちやうつ……からあ……」

その可愛らしい音は、少女のべつたんのお腹から響いていた。

トイレの個室の便座にすわった彼女は、ふるふると小刻みに震えながら、はあつ、はあつと苦しげな、熱く濡れた吐息を盛らしていた。

「ね……私の目、見て？」

「は……んっ……んうっ……」

「ふふ、花音ちゃんの目は本当に綺麗ね。素敵。キラキラしてる」

「あつ……んあ……っ……やつ……やあ……やつぱり……んっ……だめえ……」

少女の柔らかな頬を両手で挟み、くいつと少し上を向けさせる。そうやって顔を逸らす逸らすことが出来ないようにして、顔をめいっばい近づけ瞳を覗き込む。

ぎゅるるらうらうらう

「あ……はあ……ああつ……んあ……っ……せんせ……せんせえ……」

そうされると少女はまるで心臓をぎゅつと握られたような気分になってしまい、目を逸らすことも、目をつむ

ることも出来ずに、ただふるふると震える事しか出来なかった。

「んっ……あつ……あう……おなか……あつ……いたい……っ……んくうっ……」

「そんなに量は入れてないんだけど……花音ちゃん、流腸には慣れてないから仕方ないのかしら」

「あ……も……ゆるしてええ……」

「え？ 何を許すの？ 先生、ダメなんて一言も言っていないんだけどなあ？」

ぎゅるるらうらうらう

「んあつ……ああつ！ んっ……くううっ……んっ……」

「出しちゃつていいのよ？」

「や……やだあ……っ……やだあ……っ……」

額に汗を、瞳に涙を浮かべながら、羞恥に頬を染める少女。

「先生、花音ちゃんの可愛い所見たいなあ」

「やあつ……んっ……だつ……めえつ……みちやだめつ……あつ……みちやっ……だめえ……っ……あ……ああつ……ああ……っ……」

「ほおら花音ちゃん。我慢なんてしても苦しいだけだよ？ 楽になっちゃお？」

それは心を蕩けさせ、身体の内自由すらも奪い取って

ただ、まっすぐに自分を見つめてくる『先生』の瞳に彼女の心は少しずつ少しずつ障壁を取り去られていつ――

「ほおら花音ちゃん。我慢なんてしても苦しいだけだよ？ 楽になっちゃお？」

それは心を蕩けさせ、身体の内自由すらも奪い取って

ただ、まっすぐに自分を見つめてくる『先生』の瞳に彼女の心は少しずつ少しずつ障壁を取り去られていつ――

「ほおら花音ちゃん。我慢なんてしても苦しいだけだよ？ 楽になっちゃお？」

それは心を蕩けさせ、身体の内自由すらも奪い取って

ただ、まっすぐに自分を見つめてくる『先生』の瞳に彼女の心は少しずつ少しずつ障壁を取り去られていつ――

「ほおら花音ちゃん。我慢なんてしても苦しいだけだよ？ 楽になっちゃお？」

それは心を蕩けさせ、身体の内自由すらも奪い取って

ただ、まっすぐに自分を見つめてくる『先生』の瞳に彼女の心は少しずつ少しずつ障壁を取り去られていつ――

「ほおら花音ちゃん。我慢なんてしても苦しいだけだよ？ 楽になっちゃお？」

それは心を蕩けさせ、身体の内自由すらも奪い取って

ただ、まっすぐに自分を見つめてくる『先生』の瞳に彼女の心は少しずつ少しずつ障壁を取り去られていつ――

「ほおら花音ちゃん。我慢なんてしても苦しいだけだよ？ 楽になっちゃお？」

く魔女の囁きのような、甘美な邪悪とでも言うべきものだった。

§

さて、時間は少し遡る。

それはとある平和な一日、穏やかな天気の下下がりのこと……。

「もうちよつと、もうちよつとだけ待ってね。ほんともうちよつと、もうちよつとで終わるから……」

保健室の主人——能見絵理衣——は、目をぐるぐるとさせながら、凄まじい勢いでノートパソコンのキーを叩いていた。

その机には書類が幾重にも重なり、まるで山の様。不安定に積み上げられたその様子は、今にも倒壊してしまふような塔に似ているかもしれない。

「ああ、あと一〇分、あ、えと、二〇分？ さ、三〇分くらいで……多分、きつと、おそらく、はわ、はわわわ……」

そんな積もり上がったタスクを前に、希望的観測を述べる絵理衣だったが、その様子を見つめている少女——倉橋花音——は、このお仕事タワを片付ける

のは、あと一時間か二時間はかかるだろうと、冷静に判断していた。

「仕方ないですよ、お仕事だもん。だから先生慌てないで。わたし、待ってますから」

今日は学校が終わったら遊びに行こうと約束をしてい

ただけで、それがふいになりそうだからといって不機嫌になつてしまうような花音ではない。

「何かお手伝いします？ あ、でも、かえつて邪魔かな……飲物とか買ってくる？ 甘いものとか、ポテチとか、他に欲しいものあつたら……」

少し心配げな表情を浮かべつつ問いかけるその姿はまさしく天使。

「ああーんごめんね花音ちゃん！ ありがとうー！ やさしいーっ！ 先生がんばるうううっ！」

そのエンジェルっぷりに励まされ、一瞬絵理衣のやる気ゲージはマックスまで跳ね上がる！！

だつたの、だけ……。

「ああーん、やつぱむーりいー、おわんなーいよおうつ！ 花音ちゃんとデートできないよお！ うあああああん」

「ああ、泣かないでよせんせー」

次の瞬間にまた、泣き言を盛らしながら両手を『お上げ！』とばかりにばんざいして、ジタバタジタバタ暴れる情けない大人ムーブ。

「ほら、がんばろ、せんせ。コツコツやつたら必ず終わるから。せんせーがお仕事終わるまでわたしもついでから。ね？」

「うう、かのんちゃあああんっ！」

それに対して見た目の幼さからはとても予想の付かない包容力を発揮する花音は、抱きついてくる絵理衣の頭を胸に抱きしめて、よしよしなんて優しく撫でたりしてあげるのだった。

「ね、せんせ。ちよつと休憩しよ？ クラスの子にチヨ

コ貫つたんだ。すつごく美味しかったから、せんせーも食べたらきつと元気が出るよ」

少し落ちついた様子を見て、絵理衣に背を向けて、保健室のベッドの脇に置いていた通学鞆を取りに行く花音。

「ねえ、花音ちゃん？」

「んー、なあに？」

「ちよつとだけお願い聞いて貰つてもいいかしら？」

「ふえ？」

ふとそんなことを聞いてくる絵理衣の言葉を不思議に思い、振り向こうとしたその瞬間——

「きゃっ！」

花音は勢いよく、むぎゅつとベッドに押し付けられていた。その可愛いお尻を突き出したような姿勢で。

「も、もう、なに？ せんせ……つて！ ほ、ほんとなになになにつつ！」

その姿勢のまま花音のスカートを大きく捲り上げ、可愛らしい下着を勢いよくズルリと下ろす。

「ちよつ！ ちよつと待って！ せんせ！ わきゃっ！ なになに？ なにするのつつ！」

「気分転換」

「ほえっ！」

「花音ちゃんの可愛いお尻を撫で撫でしたら気分天下でリフレッシュできて元気になると思うの」

「えっ？ えええっ？」

「花音ちゃんは先生のお願ひ聞いてくれない？」

「そ、そんなことは……ないけど……」

花音の返事も待たずに、撫で撫で撫でと剥き出しになつた可愛いお尻を撫で回す。

「んっ……くすぐつた……いよ……」

「うふ、花音ちゃんのワレメちゃんかわいー。いつぱいキスしてあげたくなつちゃう」

「せ、せんせ！ お仕事あるんだよね！ 終わらせないといけないんだよね!! そ、その、終わつたら、その、シテ、いい……から……んくっ……」

「つうつとワレメを優しく撫でていく指先にぞくんと震えてしまう。

「やーだ。先生今がいい」

「そんな……あつ……ワガママ言わないで……あんっ！」

「何度かしゅっ、しゅっつとワレメをなぞつたあと、くばあつと押し広げる。

「ああ……素敵……花音ちゃんのおまんこの入口かわい……ピンク色で綺麗で、ひくひくしてえつちで……」

「んっ！ んあつ……！ やっ……！ ゆび……っ！ 入れちゃだめっ……！」

「でもね、今日はこつちじゃなくて、こつちにしようと思ふの」

「ふんっ！」

そしてふうつと熱い吐息を膣口に吹き込んだ後、絵理衣はそれまで弄っていた穴とは違う場所に、そつと指を触れさせた。

「せ、せんせ……そこは……」

「そこはなあに？」

「お、おしりのあな……」

「そう、お尻の穴。女の子はね、ここでも気持ちよくなれちゃうのよ」

「うう……うそだあ……」

「嘘じゃないわ、ほんとほんと。お友達に聞いてみたらいいのよ」

「そんなの聞けないよお……」

くすくすと笑いながら、きゅつと閉じた穴の外周を撫で撫でとする。

「んっ……くっ……やだ……そこ……きたな……」

「花音ちゃんに汚いところなんてあるわけないでしょう？」

「ひっ……！ んっ……やっ……やあ……っ！ だ、めっ……あつ！ だめっ……！ だめえっ……そこっ……」

「すりすりしたら……」

優しく、優しく今まで人に触れられたことのない場所をマッサージされ、声が震える。腰が、びくんっ、びくんつと跳ね上がってしまう。

「気持ち良い？」

「き……きもちよくなんか……あんっ……！ な……い……よお……っ……」

「そお？ それじゃあこんな風にグリグリつてしてみたらどうかしら？」

「あつ！ やっ！ やだっ！ やだあ……っつ！」

ぐつと押し込むように親指を押し当て、ぐりっ、ぐりつと抉るように動かすと、花音は羞恥と、そして何とも言えないゾクツと来るような感覚を覚えてしまつて

「ふふ、まだ、ちよつと花音ちゃんには早かつたかな？」

「はっ……！ 早いとか……あつ……！ わかんないですけど……んっ！ や……めてっ……！ あつ……ひや……っつ！」

「そういうながらもグリグリと尻穴を撫でる。親指の頭を少しだけ押し入れるようにして、ぎゅつ、ぎゅつと押す。すると、少女のきゅつと縮まった可愛らしい尻穴は、健気にもさらに強くぎゅつと縮こまり、絵理衣の指を押し返そうとしているかのように蠢いて――」

「それじゃあ、ちよつと下ごしらえしましょうか」

手に持ったもの――ひしゃげて細長くなつてしまつたピンポン球に三センチくらいのくちばしが生えた様な――その細い管状の部分を、するつと花音のお尻の穴に突き入れた。

「あ……っ！ つめた……っつ！ 何か……ひやっ……！ 入って……！」

刹那、お尻に感じるひんやりとした感覚。お尻の中に何か液状のものが注ぎ混まれたのだということを理解する。

「沈腸しちゃつた」

「ふえ？」

「沈腸、わからない？ ほら、便秘の時とか……」

「か……かんちよう……？ つ！ つつ！ な、なんでもそんなことするんですかあ？！」

顔を真っ赤にしつつベッドから跳ね起きようとしたその身体を押さえつけつつ、絵理衣はカーゼと親指で、花音のお尻の穴をぐつと押さえつけた。

「下ごしらえっていったでしょ？」

「あ……っ……んっ！ や……っ……っ！ ぐりぐりし  
ちゃ……っ……だめっ……っ！」

そのまま、ぐりぐりつと強く撫でる。

「んぎゅっ……！ あ……やあ……っ！」

ぐりぐりぐりとなで続けると、ひくん、ひくんと小さなお尻の穴が蠢く。

「あっ……やっ……だめっ……ぐりぐりだめっ……あ  
……っ……っ！」

ぱくっ、ぱくつと息継ぎをするように小さく蠢く尻穴をマッサージしつつ、可愛らしい小尻を撫で無でと撫でる。

「んっ……」

その時——

きゃるっ ちゃるるるるる

花音のお腹が、可愛らしい子犬か、はたまた恐竜の赤ちゃんのような、可愛らしい唸り声を漏らした。

「ふふ……効いてきたみたいね」

「あ……っ……やっ……だめっ……これだめっ……」

さらにぎゅつとお尻の穴を押すと、ぴくん、ぴくんつと太ももの筋肉が痙攣する。

「はっ……や……おなか……あっ……おなか……っ……」

少し中に潜り込んでいるガーゼと絵理衣の指を、きゅうつ、きゅうつと締め付ける。

「ふふ、ちよつと我慢してね」

「が、我慢って……どのくらい……？」

「一〇分……ううん、二〇分くらいかしら」

「や……やだ……そ、そんな……んっ……我慢……出来  
ない……っ！」

「大丈夫。花音ちゃんは強い子だもん。我慢出来るわ」

「あ……んっ……んくっ……そんな……あっ……」

んっ ちゃりりりりり

「だ……めっ……んっ……お尻の穴……あっ……ぐりぐり  
りしちや……だめっ……」

「あら？ 我慢出来るようにしてあげてるのにな？」

んっ ちゃるるるるる

「ち……っ……ちが……あっ！ そんな……した  
ら……っ……っ！ ひうんっ！」

ぐりつと一センチほど親指の先をねじ入れつつくりくりと廻してやると、少女のお尻の穴はぎゅつ、きゅつと強くその指先を締め付け、それと同時に絵理衣には少女の少し高めの体温が、にゅるつとした感触が、ひくひくつとした蠕動と共にはつきりと伝わってくる。

「あ……んっ……やっ……やあ……」

それからどのくらいの時間が過ぎただろう。

んっ ちゃるるっ ちゃりりり

可愛く鳴き続ける花音のお腹。

「んあ……あっ……だめっ……も……だめっ……」

ベッドに顔を埋めながら、はあはあと荒く零れる少女の吐息。

少女のお尻の穴の内側……直腸は激しく蠢き絵理衣の指先に絡みつくようで、それと同時に可愛らしいワレメからはごく僅かではあるものの、熱く湯気をたてる粘り気のあるオツユが溢れて——

「だめっ……んっ……せんせ……あっ……だめっ……も  
……ほんと……」

額に浮かんだ汗で、前髪がおでこに貼り付いている。

口もからは涎が垂れ、ベッドのシーツを濡らしている。

あらわになった可愛らしいお尻はひくん、ひくんと震えていて、それに併せてお尻の穴がきゅつ、きゅつと収縮し、ぶるぶるっ、ふるふるつと震え、痙攣して——  
「お、おトイレ……行かせて……」

懇願するような少女の声。今にも泣き出しそう……というかも泣いてしまっているような色で、彼女は声を絞り出して。  
「くすっ……」

その様子に絵理衣は笑いをうかべ、しばらくの間、何も言わずに少女が震える様子を見つめていた。

「せん……せえ……」

精一杯首を巡らせ自分の顔を見上げ、綺麗な瞳にうるうると涙を浮かべて見上げてくる花音の様子にもう一度微笑んで。

「うん、いいよ。先生が連れていってあげる」

そうして、花音の身体をお姫様抱っこで抱え上げ、ゆつくりと足を進めた。

S

——そして。

「ほら、花音ちゃん。スカート汚れちゃったら大変だから、両手で、こうやって持ち上げて」

ふるふる地震えながら、言われるがままにスカートを捲り上げる花音。

「はい、セーラー服まくり上げて、先生に可愛いおっぱい見せて」

更にセーラーの裾をまくり上げてふるふるとわななく口もとに持つて行くと、条件反射のようにはむつと唾えてしまう。

「ほら、いいわよ。出しちゃって」

「んっ……むっ……んむうっ……あめっ……あめっ……みあいえ……っ……」

改めて腫を覗き込んでやると、羞恥と混乱に正常な判断能力をすっかり失ってしまった花音は、顔をびつくりするくらい赤くして、目の焦点を目まぐるしくあちこちに移しながら絵理衣を見つめ返してくる。

「んふ……乳首立ってる」

「んも……こえ……っ……こえあ……」

「大丈夫、わかっている。先生ちゃんと分かっている。さっきの流腸にはちよつとだけ気持ち良くなるお薬が入って

たの。だから、恥ずかしくて感じちゃってるとか、そういうのじゃないから。安心して、花音ちゃん」

つんつと尖った乳首をびんつと指先で弾くと、便座の上で少女の身体が跳ねた。

「あ……あああ……あ……あ、あ、あ、んくっ……あ……」

スカートを捲り上げた手をギュッと握りしめ、セーラーの裾を加えた口もとを噛みしめて、ぞくつ、ぞくつ、ぞくつと何度も何度身体を激しく震わせて——

「だから、出しちゃっていいわよ。もう、いっぱいっばい我慢したんだもの。花音ちゃんは偉いわ。だから……」

「あ……あ……あ……」

きゅつと乳首を摘まんでやると、声にならない声を漏らして、花音の身体がびくんつと跳ねた。

「んっ……んあ……あ……あ……あ……あ……あ……」

薄いお腹がひくんひくんと蠢き、つま先立ちのようになりながら、足にぎゅうううつと力が入った。

そして。

びゅっ びゅるっ びゅるるっ

ぶびゅっ ぶびゅるうううっ

可愛らしい鳴き声。

排泄の音だなんて信じられないくらいに甘美な音。

「見ないで……あつ……せんせ……っ……みない……でえええっ……」

唾えるのをやめても、ぺろんとめくり上がったままの

セーラー。

可愛らしい膨らみと、可愛らしいぽちちをふるつ、ふるつと震わせながら花音は消え入りそうな声を漏らしたのだった。

それまで堪えていた全てを解放し、全てを絵理衣に晒したのだった。





まだ半分ほどしか入っていない薬液だったが、それはもう、花音の直腸をすっかり満たしていた。新たな薬液を送り込もうにも満タン状態のお腹は、新たな侵入を拒んでいるかのようだった。

「だけど、足を上げ続けていれば薬剤は容赦なく注ぎこまれる。」

イルリガートルから伸びるカテーテルはアナルプラグに繋がって、少女のお尻の穴からの逆流を完全に防いでいるからだ。

そんな中、ゼリー化した薬剤は、その重みで更に奥、花音の直腸の中にある小さな窄まり、結腸をゆつくりと、しかし強く押し拡げ、にゆるんつ、にゆるんつと入り込んで――

「あつ！ うあつつ！ んあああつ！ だめつ……！ だめだめつつ！ お腹……つつ！ お腹……つ！ 奥……つつ！ 拡がるうう……つつ！」

一度入り込むと後は早かった。結腸を強引にねじ開けたゼリー状の薬剤は、重力に導かれどんとんと花音のお腹の中を満たしていった。

「うあ……！ あつ……！ やつ……！ おく……つ！ 入って……つ！ あ……つつ！」

たぶんつと音がするほどに膨れあがった少女のお腹。それでもなお奥へ奥へと流し込まれ、更に大きく花音のお腹を脹らませていく。

~~~~~

またしても、少女のお腹が可愛らしい鳴き声を上げた。

くきゅるるるる

ふうつ、はあつと苦しげな花音の吐息にあわせる様に、その鳴き声は響き続ける。

「はあ……つ……はあ……つ……熱い……んつ……重い……あつ……くる……し……つ……も、はいら……ない……あつ……！ も……はいら……い……つ！ のに……いいつ！」

さすがにもう無理だと泣き言を漏らしたとその瞬間、ずるるつと勢いよくゼリーが結腸を超えていった。

「あつ！ んつ！ きゅうらんつ！」  
ぎゅつとお腹の奥に力を入れて侵入を拒んでいるのに、それでもなお、お腹の奥の奥に潜り込んでくる圧力を拒めなかった。

「む……りつ……あう……むりい……むりい……つ……」  
ふるふると首を横に振る。

「ほろぼろと涙を零しながら苦しげに吐息を盛らす。  
「んふ、もう少しよ花音ちゃん。もう少し、ほら、頑張つて。ゴーゴーレッツゴー花音ちゃん」

そんな少女の様子を見つめながら、場違いに軽い声を上げる絵理衣。

その頬は赤く上気し、漏れる吐息は僅かに荒く、熱く。爛々と輝く妖しい瞳は少女の悶える様をじつと、一秒たりとも見逃さないとばかりに見つめ、射貫き、ねつとりと纏わりついていった。

~~~~~

「はいつ……たつ……あう……つ……入り……つ……ましたあ……つ……」

やがて、花音は薬剤の全てを尻穴で呑み込みきって、ぶるぶるつと震える。

「も……だめつ……おなか……つ……ばくはつ……しちやう……あつ……ああつ……」

ぎゅうつと目を閉じ口唇を噛みしめて、みちみちに脹らんだお腹をたぶん、ぶるんつと揺らした。

「だ……あつ……ださ……つ……せて……あう……出させて……んつ……く……あつ……ああつ……！」  
はち切れそうなほどの苦しきは、羞恥より上回る。

何度も流腸されてその様子を全部見られていたからということもあつただろう。だけど、それを抜きにしても、重さと、熱さと、内側からの圧力は、彼女にそんな言葉を口走らせていた。

「ふふ、慌てない慌てない」  
汗に濡れた肢体。口もとから零れる涎。びくん、びくんと小刻みに身体を震わせる花音の足から、わざとゆつくりと、もたもたと手際悪く、たつぷりじらす様になら、イルリガートルを外して行く絵理衣

「はい。出しているわよ」

「あつ……うつ……うあ……つ……！」

イルリガートルを取り外されると、少女は高く掲げていた腰を落とし、ぞくんと震えた。





続けようとしたが、どうしてもそれを達成することは出来なかった。

「あ……うっ……あう……せん……せえ……っ……」

半ば意識を飛ばした状態で、ぱくぱくぱくつと震える口もと。

「せん……せえ……あつ……んっ……たす……け……て……っ……」

そもそも彼女にこの責め苦を与えているのは絵理衣だというのに、健気にも頼り縋ってくる子犬の様な瞳。

「ふふ……出せない？ 花音ちゃん？」

「あ……うっ……でな……っ……あうっ……でないっ……のっ……あつ……！」

背筋がゾクゾクとする。

胸が熱くなり、全身に広がっていく。

可愛い。可愛くてたまらない。こんなに可愛い娘を鳴かせ、悶えさせ、震えさせるといのは何と背德的なんだろう——

「うん、それじゃあ、先生が助けて上げる」

「んっ……あつ……あう……っ……たすけて……あう……せんせ……たす……け……」

「ええ、助けて上げる！」

その瞬間、絵理衣はぎゅつと強く、強く強く、花音のお腹を押し込んだ。

「……」

その強い圧力に少女のS状結腸の奥にあったゼリーが、勢いよく排泄された。

「あつ！ あつ！ ああつっ！ んあああああつっ！」

ずろろろろっ！ と肛門を盛り上がらせて勢いよく排泄されるゼリー。

「ふあ……あ……っ……ん……あつ……ああ……っ……」

一瞬の安堵感にきゅつと閉じて、後から後から溢れ出ていたゼリーが千切れる。

「んっ……あつ……ああ……ああ……っ……」

それからもう一度、ずろろろろっと勢いよくゼリーは排泄されて。

「あつ……ああ……あつ……」

花音の可愛い鼻から、つうううつと鼻血が垂れ出いった。

「はひ……ひっ……ひうっ……」

小さな胸を激しく上下させながら、口許がわななき、熱い吐息が漏れた。

「んっ……ひっ……あつ……まだ……まだでるっ……で……ちやううう……っ……」

それでもなお、排泄され続けるゼリー。未だぽっこりと脹らんだままのお腹は、きゅるるっ、ぐるるるっ可愛らしく唸り、押し上げられた肛門はもりっ、もりっと脹らみながら、可愛らしく、そしてエロティックに震える。

「あ……あう……あ……あ……」

「んふっ、どうだった？ 花音ちゃん？」

「は……あつ……ああ……あう……」

「花音ちゃん？ おーい、花音ちゃん」

絵理衣が問いかけても、少女は返事を返しはしなかつた。

た。

「あう……んっ……は……ひ……おし……りっ……あう……おし……りっ……ずつと……あつ……ずつと……ん……あ……っ……きもち……い……の……っ……つづいて……」

初めて味わうあまりに強烈な刺激——バチバチと頭の中で電気が弾けるような未知の快、感に彼女の意識は完全に吹き飛んでしまっていた。

「あら……やり過ぎちゃった……？」

それを見て、一瞬眉をひそめる絵理衣。

「ふふ……」

「ただ、改めて彼女はくすつと口もとを歪めて。それじゃあ、もつと、もつといっぱい色々教えてあげよつか」

にんまりと、悪い悪い大人の笑みを浮かべた。

「かーのんちゃん」

「ふえっ!？」

はつと目を覚ますと、花音は自分がベッドにうつ伏せになっていることに気がついた。

手首と足首をまとめて縛られうずくまるような姿勢だが、腰にも縄を回されてベッドに押しえつけられているのでかなりの窮屈さを感じる。

「せん……せ? あ、あれ?」

絵理衣の声に応えようと首をひねり、横を向くが、彼女は背後にいるのだろう。その姿を視界に捉えることはできなかった。

「えっ……? ふぎゅっ!？」

すると突然、背中を反らせるようにしてお尻を持ち上げられる。

その反動で押しつぶされた肺からは、可愛らしくてユーモラスな声が漏れ出てしまう。

「んふふ〜花音ちゃんのお尻の特等席〜♪」

そんな花音の様子をにんまりと見つめつつ、絵理衣は少女のお尻と共に持ち上げた下腹部の下に自分の身体を滑り込ませた。

「さーて、花音ちゃんのお尻の穴の具合はどんな感じかなあ♪」

そして、ほとんど真上を向いてヒクつくている淡いトキ色の蓄みを、まるでそうするのが当たり前であるかのようにぐいっ指で払げる。

「にゃっ!?!? せ、せんせ——」

複数回の流腸に——特に、最後のゼリー流腸にはお

腹の中をすっかり空っぽにされてしまった——緩んでしまった肛門は、少女の浅い直腸の中が丸見えになるほど簡単に開き、ピンクの粘膜を空気にさらす。

そのぞくつと来るような刺激に音は慌てたように抗議の声をあげようとして——

「んぎゅっ!」

しかし、最後まで言葉を発する間もなく、後ろから伸びてきた絵理衣の脚が首の下に入り込み、くいつと顎を持ち上げ軽く首を絞めるような形で遮られてしまった。

「あつ……やつ……んあつ……せ……せん……んっ……くるし……」

「あらら、ちよつと角度が急すぎたかしら。こんな感じ?」

「は……ふ……うん……少し楽に……つて、そうじゃない——んぎゅっ!」

縄と絵理衣の肉体によって身体を押し込まれ、すっかり身動きが取れなくなってしまった花音。先生の身体は温かで柔らかかったからそこまでキツというわけではなかったけど、それでもやっぱり自分の身に何が起きているのか分からないのは、少女の不安を掻き立てるには十分だった。

そして、そんな花音を他所に尻穴を玩具の様に何度も何度もくぱくぱつと開け閉めして、絵理衣は子供の様に純粹な、幸せと感動とわくわくが入り交じったような表情を浮かべてみせた。

「ピンク色の粘膜がひくひくしてて可愛い♪ すごくえっちゅ♪ ふふ……腸液もいっぱい溢れてお尻の穴から零れてる。どう? 花音ちゃん? こんなにえっちなお

尻の中を先生に見られちゃってどんな気持ち?」

「ち……がつ……あう……つ……ちが……わたしのお尻……んくつ、えっちじゃない……もん」

「そんなことないわよ、自信持って! ひくひくお口を開けたり閉じたりしてる花音ちゃんのお尻の穴、ほんとうにえっち。可愛い花音ちゃんにびつたりのお尻の穴だわ」

「ちがう……もっん……はう……つ……ちがう……もん……」

自分ですらしつかりと見たことがない場所をじっくりと観察され、少女の羞恥心は極限にまで高められていく。必死で否定しようと思っても実際自分のお尻の穴がどんなことになっているのかわからなくて、ただ、いつもなら感じるはずのない場所に空気の流れを感じてしまつて、ぞくん、ぞくんとお尻が踊ってしまった。

「くすっ……そんな控えめな花音ちゃんには、自分のお尻の穴がどれだけえっちなのか、ちゃんんと教えてあげないといけないわね」

そんな少女の羞恥と、微かな官能の様子にほくそ笑みつつ、絵理衣は殆ど動かせず前を見ることしか出来ない花音の眼前に、自分のスマホを立てた。

「はい、こんにちわ、花音ちゃん」

次の瞬間そのスマホの画面に映つたのは絵理衣の顔。いつも綺麗で、ときおり子供みたいに笑って、そして更にときおり、今みたいな口唇を吊り上げた悪い笑みを絵壁ている。

悪戯っぽくて何か悪いことを考えている様子の声は前



花音ちゃん、お尻の中を見られて気持ちよくなっちゃってるのかなあ」

「ちが……っつ！ わた……っつ！ きもち……あ……よく……なんか……」

慌てて言い訳しようとするが、最後の方は小さく自信なさげに萎しぼんでしまう。

そうしている間もスマホに映った花音のアナルは、絵理衣の指でくばつ、くばつと開け閉めされ、ぐりぐりぐりつて親指の先で刺激され、とろーりと白みがかつた、『本気の』オツユすら溢れさせてしまつて。

「指、入っちゃいそうね」

「ふえっ!？」

流されかかっていた花音はその声に我に返つた。

「入れてみちやおつか？」

「だ、だめっ！ だめだめっ！ そんなの……ぜつたい……だめっ……!」

ぶんぶんと首を振ろうとするが、しつかりと顎をホルドされて出て出来ない。花音に出来るのは、せいぜいお尻をふりふりと振り立てることくらい。

「あは♪ そんなに期待されちゃうと先生嬉しくなっちゃうな♪」

「ち、ちがっ！ ちがいますっつ！ わたっ！ わたしっ……んっ！ くううううんっつ！」

ズブリと人差し指を沈みこまされ、花音は子犬のような声と共に、押さえ込まれた身体をガクガクと揺らした。

「うふふ♪ 花音ちゃんのお尻の中、あつたかあい」

「い……っ！ んっつ！ いうんっつ！ か……きつ

……あつ！ まわすの……っ！ だ……っ……めえええ……」

きゆうつきゆうつと指をくわえこみ、締め付けてくる健気な内壁をぐりぐりと掻き回す。

絵理衣の爪は長く伸ばされていて、このような行為に全く相応しくない。だけど、そんな指でも不思議と花音の柔らかで敏感な粘膜を傷つけることはなく、むしろ官能を与えていく。

カリツ、カリツと引つ掻くような刺激さえ、少女にはゾクゾクと身体の芯が痺れてしまう、じいんと痺れる快楽として伝わっていた。

「あつ！ んっつ！ あんっつ！ ふあああんっ！ やだっ……っ！ おし……りっ……なか……っつ！ ぐりっ……! ぐり……っつ!」

絵理衣の指をくわえたまま、花音のアナルはひくひくと震えていた。

押し開いてやるまでもなく、くばつ、くばあつと閉じたり開いたりするその場所は、『もつと、もつと』とおねだりしているようにも感じられた。

「指、増やしてみる？」

「……っ!」

ほそつ耳元で嘯くと、少女の身体がびくんつと震える。「花音ちゃんのお尻の穴、ふにやふにやになつてるし……もう一本……二本くらいなら入っちゃうかも？」

「……」

返事はない。返事はないが、熱く、早く、そして蕩けた吐息だけが響く。そして耳元は赤く染まり、絵理衣の

指をくわえこんだ尻穴はきゅつ、きゅうつて収縮して。「くす……♪」

いつもなら返事をさせるところだが、今日はその気にはならなかった。

「期待に答えてあげないとだめよね」

ただこの少女を蕩けさせ、乱れさせ、とろとろのふにやふにやにしてやりたいと思つた。

「ほら……花音ちゃん。もう一本……増やすよ……?」

「んっ……くっ……んっ……」

足首を握っている手にぎゅつと力がこもる。痕がついてしまうんじゃないかって程に。

「はっ……あつ……あああ……はっ……はふっ……はふっ……はっ、はっ、はっ、はっ……」

息が更に早くなり、浅く苦しげで、だけどどこか甘い、声にならない呻きが漏れる。

「あつ！ ああああつ!」

ずぶんつと二本の指が収まりきると、少女はぞくぞくんと身体を激しく震わせた。

「あは……入っちゃったね二本。きゆうきゆうつて締め付けて来てるね。気持ち良い……?」

「わ……かっ……あつ……わか……なっ……」

「そっか……わかんないか……それじゃあ……もう一本増やしてみましようか?」

「ひ……っつ!」

返事は聞かない。必要ない。

花音に考える時間すら与えず、人差し指と中指をくわえこんでいる狭穴にもう一本、薬指を押し当てて――

「あっつ！」

びくんと少女の身体が震えた。それは一瞬、押さえ込んだ絵理衣の身体を揺らす程の力だった。

「ああっつ！」

ぎしつ、ぎしつとベッドが軋む。

がたつ、がたつと揺れが伝わる。

「あつ……！ あああっつ！ んあつ！ ああああああっつ！」

「ふふ……すごい……花音ちゃん、私の指、三本呑み込んだんじやつた」

「は……は、あ、あ、あ、あ、あっつ！」

中でぐねぐねと三本の指をめちゃくちゃに動かしてやると少女の腰が卑猥に踊った。まるでお尻を絵理衣に押し付けてもつともつととせがんでいるように、くねつ、くねつ、くねつと蠢いていた。

「上の壁と下の壁、どつちが好き？」

「ひっつ！ いっつ！ いうっつ！ いうああんっつ！」

ぐつちゅぐつちゅと音を立てながら、背中側の内壁を、そしてお腹側の内壁をぐりぐりとする。

「あ、こつちかな？ こつちかな？」

「んひっつ！ ひっつ！ ひっつ！ ひっつ！ ひきゅううううんっつ！」

どうやらお腹側の方が好きらしいと判断して、こりこりこりこりと強く引つ掻いてやる。

「すごい、花音ちゃんすごい。直腸の中うねうねしてる。先生の指に絡みついてきてる。あはっ♪ えつちだなあ♪

♪ 花音ちゃんのお尻はえつちだなあ♪ こんなにえつ

ちなんだつたら、もつともつと鳴かせてあげたくなっちゃう」

「ひっつ！ あっつ！ んああっつ！ だつ……めつ

……！ もつ……はい……なつ！ いれ……っつ！ だめっ！ だめ……ええええっつ！」

既に三本の指を受け入れ拡がりきっている花音のアンクルに、絵理衣は小指もプラスした。きゅうきゅうと締め付けてくる尻穴は少しの抵抗を見せたけれど、先が入ってしまったら後は早かった。

「すごいね！ すごいね！ 花音ちゃん！ すごいね！ 四本入ってるよ！ 先生の指が四本も入ってる！」

「あ……ああ……うそ……うそ……あ……わた……おし……あな……」

「ウソじゃないよ、ほら、四本入ってて、こんな風に拡げたら……！」

「んいっ！ んいっ！ ひろ……がっ……ひろげ……ちや……っ！ だ……めええっ！」

ずつぽりと呑み込まれてしまった四本の指をぐりぐりんと大きく円を描くようにして掻き回してやると、少女の腸粘膜が露わになりとろとろと腸液が溢れた。そして更に、その下の可憐な花園からも、白く濁って泡だった粘度の高い愛蜜が零れ落ちていった。

「あ……ああ……ああ……」

その様子の一部始終は、全てスマホの画面に映っている。信じられないほどに拡げられた自分のお尻の穴を前に、花音は目を逸らすことも出来ない。

いや、今の彼女はそれに目を奪われていたと言ってもよかつただろう。その証拠に花音は熱く短く浅い吐息を漏らして、頬も首元も耳も全部真っ赤に染めて、見開いた瞳はうるうるると潤み、半開きになった口もとからは涎が溢れて――

「すごいね♪」

そんな彼女の耳に、絵理衣は囁いた。

「花音ちゃんのお尻、一生懸命気持ち良くなるうとしているのね」

ふうふうと熱い吐息を吹きかけながらくすくすと笑った。

「あ……っ……んっ……んあっ……せ……あつ……せん

せ……あつ……わた……わたし……わたし……あつ……ああ……っつ！」

「うんうん♪ 無理に言葉にしようとしなくていいよ。感じて。身体で。心で頭で。ただ、感じて」

「ひ……っ！ んっ！ ひんっつ！ ひいひんっつ！」

「どう……？ わかる……？ きもちいい……？」

「あつ！ ああつ！ んっ！ あつっ！ きもち……っつ！ い……っ！ すすうううっつ！」

ゾクゾクゾク。

口にするとそれは心に染み入った。『そうだ、自分は気持ちいいんだ』ってハッキリと認識して、それがまた身体の中で暴れ続ける官能にフィードバックされた。

「そう……ふふ……そう。えらいね、花音ちゃんはえらいね。上手に気持ち良くなれてえらいね？ じゃあ、今度……」

すると再び絵理衣は花音の耳元に口を寄せて、先ほど



よりもより艶っぽく、小さく囁いて。

「……イっちゃえ♪」

「っ！ つつつつつっ！」

四本の指を手刀のように縦にしてぐつと直腸の奥に突き込む。そして、ぐるつと三六〇度回転しながら——勢いよく抜き取った。

その、刹那。

「~~~~~」

少女は、声にならない吐息の塊のようなものを吐き出して、びくびくびくつと身体を震わせ、ぐうううつと背中を弓なりにして——

ふっん、と糸が切れたように脱力し、崩れ落ちた。

「は……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……」

ひくん、ひくんと痙攣している身体のあちこち。

四本の指を受け入れていた尻穴は、未だぼっかりと穴を開けた状態で、少女の吐息に併せてきゅつ、きゅつと閉じたり開いたりしていた。

「上手にイケたね♪」

そんな花音の耳元に、改めて囁きかける絵理衣。

「うふふ……それじゃあもつと、もつと気持ち良いこと教えてあげるわね♪」

そして彼女は、爛々らんらんと燃える様な瞳で花音を見つめ……ペろりと、長い舌で口もとを舐めた。

「あの……せんせ……？」

「ふふふ どうしたの？」

花音の不安げな声に、絵理衣はくすくすと楽しげに応えた。

「なに……するんですか……？」

「ふふ……イ・イ・コ・ト♪」

先ほどまでの拘束は解かれていたものの、花音は相変わらず絵理衣の表情を見ることが出来ない。

声を聞けば概ね彼女は上機嫌なのだろうと言うことは想像出来たが、それでもやっぱり相手の顔が見えないのは、少女にとって大きな不安だった。

「えっと……イイコト……ですか……？」

「ええ、すつごくいいこと」

嫌な予感がする。

というか嫌な予感しかしい。

何故なら能見絵理衣という人は、上機嫌の時ほど意地悪なことを考えている女性だからだ。

その彼女が『イイコト』というのはなんだかすごく怖いというか、不安。

だけど、同時に少し、好奇心を覚えてしまう自分がいた。先ほど体験した、頭の中が真っ白になってしまったほどの絶頂——それよりもっとすごいことをさせられるしてしまうのかと思うと、胸がドキドキとしてしまった。

でも、それでもやっぱり相手の顔が見えないのは不安だ。だっていつもの様な悪い顔なのか、もっともつと悪い顔なのか、それがわからなければ、覚悟を決めることも、準備することも出来ない。

だから花音は絵理衣の顔を見たかったのだけど、今の彼女の状態はそれを不可能にしていた。

花音は今、彼女の体格には少し大きすぎる生徒用の椅子に、背もたれ側を前にして拘束されていた。太もも、手首、そして首。その三カ所を固定してしまうと、彼女はもう、ガタガタと椅子を揺らすことくらいしか出来なかった。

背もたれにかかった縄はぐいっと少女の身体を引き寄せ、結果として花音はお尻を突き出し、可愛らしいワレメと、先ほどあんなに拡張されたのいつの間にかきゅつと閉じている可憐なお尻の穴を露わにしていた。「花音ちゃんも本当は予想がついてるんじゃないかしら？」

絵理衣の言うとおり、この姿勢を取らされているということは、狙いが『そこ』なのだろうと想像が出来る。

ただ、一体それじゃあ『ここ』に何をしてもりなのか、それはやっぱり想像のつかないことだった。

「はい、問題です。先生は花音ちゃんのお尻に何をしようとしているでしょう!? あ、言っちゃった」

わざとなのか天然なのか、うっかり答えを口走ってしまっ絵理衣。

「なに……するの……？」

その答えは確かに花音が想像していたものだったけど、それ以上のことは何もわからなくて、結局怯えた様な声を上げることしか出来なかった。

「ふふ……そんなに心配しないで」

そんな花音の様子にくすくすと笑う絵理衣。

「答えを言っちゃったし、もうクイズをしたって意味ないものね」

そして絵理衣はゆっくりと花音の前に回り込み……手に持っていたものを『はいっ』って目の前に掲げてみせた。

「ひ……っ！」

そのあまりにあまりな形に息を呑む。

「そ……そんなの入らない……」

太さに顔を青ざめさせる。

それは花音の腕ほどの太さがあるのではないかと思われ、ねつとりと黒光りする『何か』だった。

その表面にはびつしりと棘の様なものが生えていて、そんなものでお尻の穴を抉られたら壊れてしまうと思っ

た。

「や……やだ……そんなの……や……」

ふるふると首を振る。がたつがたつと椅子を揺らして無駄な抵抗を試みせる。

「ああ、ごめんなさい。怖がらせちゃったわね。でも、大丈夫。このオモチャ、こんな形してるから太く見えるけど、そんなに太くないから。さっき私の指が四本入っただし大丈夫」

「でも……でも……」

「それにこのトゲトゲみたいなのも柔らかいの、痛くないの。ほら」

「んっ……」

『それ』を頬に押し当てられて思わず目を瞑る。

「あ……やわらかい……」



「あはっ♪ 入った♪ 結腸を超えたわね♪ ここを超えちゃえば……どんだん入る」

「あっつ！ うあんっ！ いうっつ！ いああんっつ！」

ずるんっ ずるんっ ずるんっ

押し込まれる度、細い場所を通り抜けていく感覚。その通り抜けられる感覚に花音は喘ぎ、身体を震わせ、悲鳴をあげる。

「あ……んっ……あ……だめっ……もっ……だめっ……おなか……あっ……いっばい……んくっ……いっばいだから……」

「うふふ うちよつとで全部入るから頑張つて」  
気がつけば花音のお腹は外からでもはつきりとわかるほどに膨らみ、ふるふると震えていた。異物を排除しようとしているのだろう、きゅるるっ、ぐるるっと唸り、蠢いていた。

「さあ、最後の三つ。いくわよ」  
「だ……めっ……んあっ……だめ……なのっ……あっ……もうっ……もうっ……いっばい……あっつ！ んあんっつ！ んんっつ！ んうんんんっつ！」

ずぶっ、ずぶっ、ずぶっ、先端が結腸を超えていく感触が絵理衣に確かに伝わった。その度花音はがたっ、がたがたと椅子を揺らし、甲高い嬌声があがった。

「はあ……はあ……はあ……くる……し……っ……あう……くるし……せんせ……あ……」

ひうっ、ひうっ、ひうっ、口もとをわななかせ、ぞくぞくと震

える少女。

「も……だめっ……抜いて……あっ……抜いてえ……っ……」

今にも泣き出してしまいそうな、罪悪感を煽る視線が絵理衣を真っ直ぐに見つめる。

「くす♪ 苦しい？ 本当に苦しいだけ？」

「はあ……っ……はふう……っ……お腹……あっ……おなか……んくっ……いっばい……あっ……はち切れちゃいそうで……だめっ……もう……だめっ……」

だが、苦しげに吐息を漏らしてはいるものの、花音が苦痛だけを感じている訳ではないということも絵理衣には伝わっていた。

その証拠に彼女の可憐なワレメはほんのりとほころび、とろとろと愛蜜を溢れさせていた。  
「うん、それじゃあ抜いてあげましようか」  
そんな花音を見つめつつ、優しく微笑む絵理衣。

その優しさは『信じてはいけない』優しさ。  
「はあ……あっ……はやく……んくっ……抜いて……あっ……抜いて……っ……」

「ふうん……早く？ 本当にいいのかしら」  
くすくすつと笑って、花音のお尻の穴から飛び出している輪っかの突いた『それ』の終端に指をかけ、そして――

「ひっ！ あんっつ！」

ひとつ分を引き抜くと、お尻の穴と、そしてお腹の奥――結腸をずるんとを同時に擦られて、頭の中で電気が弾けた。

「あ……えあ……？ い、いまの……ひっ！ ひいんっつ！」

ずるるるるるるるるるる

更にひとつ、今度はふたつ。  
「や……あ……な……いま……あう……いま……っ……ごりっつ……ごりっつ……」

「ふふ……気持ちいいでしょう？ 結腸と肛門、一緒に刺激されるの、すごいでしょう？」

「あ……やつ……な……な……んくっ……な……っ……？」  
入れられるときも確かに快感はあつた。にゅるっ、にゅるっ、と太いものが通り抜ける感覚は頭の中でチカチカとしていた。

でも、違う。さつきとはまるで違う。  
入れられるときより出されるの方が、一〇倍も、二〇倍も、いや、そんなことを考えられないほどの強烈な刺激。

「コレに生えてる棘みたいなのはね、入れるときは柔らかく感じるけど、出すときはざりざりっつて中を抉るの。特に狭い場所を通り抜けるときはぎゅっつて引っつかかっ

て、そう簡単には出せないぞって、頑張っちゃうの。だ

あはっ♪ あはっ♪

から……こうやって……」

「や……あ……だ……めつ……やつ……あ……っ……」

ザリザリザリザリッ

「いつ！ ひうううんっつ！」

ぶぼぼぼっ

「ひうんっつ！」

ぢゅぼぼぼぼぼっ

「あつ！ んっ！ きゅうううん……っ！」

勢いよく引つ張り出される度、悲鳴が上がる。

信じられないほどの快樂の奔流に振り回されて、子犬の様な鳴き声を漏らしてしまう。

「あ……は……はう……はううう……」

ぼたぼと溢れ出た愛蜜が、花音の足下に水たまりを作っていた。

それでもなおえつちなオツユは止まることを知らず、ぴちよん、ぴちよんつと音を立てていた。

「も……だめつ……あつ……だめつ……しんぢやう……わたし……あつ……こんなの……しん……ぢやう……」

「入れたままにはしておけないでしょう？ ちゃんと全部抜かないと」

「あ……だつ、だめつ……！ まって……！ ちよつと

……きゅう……けい……んっ……きゅうけい……させ……て……」

「ええ、それじゃあ一気に引き抜いてしましましょう」

「あ……やだ……だめつ……だめつ……そんなの……だめつ……」

聞こえてないわけがないのに聞こえていないふりをして絵理衣はくすくすと笑って、そして、ふうつとひと息をついて――

にゅるっ にゅるるるるっ

ぶぼぼぼぼっ ずるるるるううううう

こりっこりこりっつ じりりりり

じりりりりりりりり

~~~~~

瞬間、花音の可愛らしい鼻からふううつと伝つてくる鼻血。

がたんっ がたがたがたたたたっ

少女は拘束された身体を無茶苦茶に揺れ動かして、逃がすに逃がせない快樂の奔流に呑み込まれて――

「あ……ああ……ああ……」

鼻血が口もとに垂れていく。ぎゅつと噛みしめていた口唇の腋からは、泡だつた唾液がこぼれていく。

「ふふ……気持ち良かったね。花音ちゃん♪」

その鼻血を絵理衣指先で拭くと――  
ぺろりと、美味しそうに舐めた。



「あの……せんせー？」

「なあに、花音ちゃん♪」

激しい絶頂の余韻がようやく去って、それでも疲れてしまつてベッドで横になつていた花音は、ふと、思い出した様に口にした。

「お仕事、もう大丈夫そうですね？」

「お仕事？ なんだっけ、それ？」

だけど、『あんなハードなことしたのに花音ちゃんは体力があるなあ、これが若さかなあ』なんて考えていた絵理衣は、一〇〇%天然で不思議そうに首を傾げる。

「えつと……」

「ん？」

「せんせー、気分転換してわたしのお尻撫でたら元気になるつて……それだけで終わらなかつたけど……」

「あ……！」

そこまで言われて、ようやく気がついた。

「あーっ！ あーあーあー！」

「可愛らしいジト目で睨まれて、『やば』とか思いつつどう誤魔化そうかと思考を巡らせる。

「もしかして……嘘でした……？」

そんな絵理衣を、花音はむうつとくちびるを尖らせつつ、ぶくうっ頬を脹らませつつ見つめてきた。

「せんせー、わたしに嘘つきました？」

「ズルい。すごくズルい。こんなしぐさのひとつひとつが可愛すぎて困る。」

笑つても怒つても、息も絶え絶えになつても官能に震えてても可愛いだなんて、こんなの完全に反則

じゃないか。

「花音ちゃん！」

「ふえ、は、はいっ！」

「ありがとう！ 花音ちゃんのおかげで先生、たつきさん気分転換してリフレッシュ出来たわ！」

「う、うん……だつたら……よかつたけど……」

その上押しに弱いのも可愛い。

「でもね、お仕事頑張るためには、もうちよつとだけ花音ちゃんに甘やかして欲しいの！」

「え……えと……えへ……別に……いいですけど……」

しかも、心配になるくらいチョロい。

まあ、押しに弱いのもチョロいのも自分に対してだけだつたら全然構わないというか、むしろウェルカムなんだけだ。

「わたし、何すればいいですか？ えつと……お腹痛いのはもう……や……かな……」

「大丈夫。痛くないない」

「ほんとに……？」

「ほんとほんと」

上目遣いに自分を見つめてくる子犬みたいな瞳。不安そうにしながらも、どこかわくわく、どきどきしているようにも見えるその様子。

「先生ね、花音ちゃんがタマゴ生んでるところ見たいの！」

「……」

時間が止まった。

「えつと……？」

花音はぼかんで、小さく口を開けて小首を傾げながら絵理衣を見つめた（これがまた可愛い）。

「たま……じこ？」

「そう。タマゴ」

「えつと……わたし、ニワトリさんじゃないよ？」

イマイチ……というか、全く状況を飲み込めていない様子。

「もちろん。花音ちゃんはニワトリさんより可愛いからね」

「えへ……そう……ですか？」

チョロイ。本当にチョロイ。『先生花音ちゃんのこと心配になつちゃうわ、誘拐とかされちゃうわない？』とか思つたりもしたけれど、よくよく考えると多分その犯人は自分なので、心に柵をつくることにした。

「花音ちゃんに産んで貰うのは、じゃーん、これでーす」

そして、絵理衣が指に摘まんでは花音の眼前に見せつけたのは、ウズラの卵ほどの小さな物体。

「あ……ちつちやい」

「ええ、ちつちやいの。それにこんなにやわらかい」

親指と人差し指で挟んできゅつきゅつとしてみると、ふにゅつ、ふにゅつと形を変える。

「えつと……もしかして、それ、わたしのお腹に……」

「ふふ、正解。花音ちゃんはかしこいなあ」

お尻に手を回し隠すようにしながら、ベッドの上で後ずさる花音。

「も、もう……お尻は……や……かな……」

「あら、でも、さつきのものより全然ちつちやくてやわ

らかいわよ？ それに、さっきのだったって花音ちゃん、辛  
いだけじゃなかったんでしょ？」

「それは……そう……だけど……」

ぽつと頬が染まる。

はふつて、熱い吐息が漏れる。

瞳はうるうるとして、ちっちゃな乳首も少しだけ  
んって尖って、きゅって閉じたワレメの奥がじゅんって  
熱くなってしまつて。

「興味……ない？」

「……」

「花音ちゃんがいやなら先生やらないけど」

「うー……」

困ったような顔。

あつち、こつち、またあつち、と視線を彷徨わせる。

そして――

「先生が……したいなら……いい……よ」

「くすつ」

につこりと微笑みながら、内心『作戦通り』なんて悪  
い顔を浮かべる絵理衣。

『ふふ……このタマゴはね、最初はこんなにちっちゃい  
けど……水分を吸うと、何倍にも大きくなるのよね』

誰に言うわけでもないのに、心の中でとても説明つぽ  
いセリフを呟いて――

絵理衣は自分の拳よりも大きくなってしまつタマゴの  
ピフォーアフターを頭の中で想像して、改めて、にんま  
りと子供の様な笑みを浮かべた。

S

「はい、それじゃあ横になつて。うん、そうそう左手は  
枕の下に入れておいた方が安定するかな」

「う、うん……」

誘導尋問のように花音の承諾を得た絵理衣は、少女を  
側臥位――つまり、横を向いた姿勢で、ベッドに寝転  
ばせた。

「緊張しなくていいわよ。さっきので花音ちゃんのお尻  
の穴、十分柔らかくなつてから。だから何にも怖くな  
いの」

「う……それ……言わないで下さい……恥ずかしい……」

先ほど自分が見せた痴態を思いだしてしまうのだろ  
う、ぽつと頬を染め視線を逸らす。そんな花音の様子を  
とても可愛いと思ひながら、『いつまでそんなこと言っ  
てられるのかしら』つて、心の中の絵理衣は意地悪な表  
情を浮かべていた。

「ひゃん！」

「あは、びつくりしちゃつた？ でも、大丈夫よ」

小さなタマゴをお尻の穴に押し付けると、びくんつと  
少女の身体が跳ねる。

「安心して……ほら、力抜いて……息を……すう……はあ  
……すう……」

「すう……はあ……」

深呼吸に併せて、花音の小さなお尻の穴がぱくつ、ぱ  
くつて開き、閉じる。

さつきあんなに沢山詰め込んで思いつきりひり出させ  
というのに、それでも少女のアナルは可憐で、清楚で、  
いたいけで、うつすらトキ色の佇まいのままだった。

「そうそう、その感じ。ほら、続けて。すう……はあ  
……すう……」

「はあ……すう……はあ……」

「えいつ！」

「んにうつ！」

そして何度かの深呼吸のあと、少女のお尻の穴が緩ん  
だ瞬間を狙つて、ぐつとタマゴを押し込む。

「あ……んっ……んんっ……んんう……」

「ほら、辛くないでしょう？」

「う、うん……」

「それじゃあもつと入れていい？」

「も……もつと……？」

すっかりほぐれた花音のお尻の穴は、考えていたより  
もあつさりとなタマゴを呑み込んだ。その時覚えた感覚  
は彼女にとつて不快なものではなかったらしく、はあ、  
はあ、と深く静かな吐息を漏らしつつも、うつとりとし  
た表情を浮かべていた。

「もつとつて……どれくらい……？」

「ふふ、ないしょ」

「た、たくさんはダメだよ？ こわい……こわいから、  
だめ……」

「大丈夫よ。私が花音ちゃんの嫌がることとしたことある  
かしら？」

ついさつきやっていたじゃないかとツツコミを入れた



あ……つつ！

むりゅっ むりゅりゅっ

少女の小さなアナルを内側から押し開くようにして、  
少しだけ頭を出すタマゴ。

「あ……んっ……こ、これっ……んくっ……ど……どれ  
だけ……あう……っ……おおきくなる……んっ……です  
かあ……？」

それはほんとうに一部分しか出ていないにもかかわらず、  
元のサイズからは考えられないほどに大きくなって  
いるように思えて、花音は思わずそんな言葉を口走って  
しまった。

「くすっ……知りたい？」

「ひ……っ……」

その笑顔を見て、それが間違いだつたと気づく。

「それじゃあ、教えてあげようかな」

「あ……んっ……やっ……やっぱり……い……」

だが、それはもう手遅れ。絵理衣はにこにこことても  
機嫌の良さそうな笑顔を浮かべて、わざとらしく間を  
取って。

「じゃーん、こんなにおつきくなっちゃうの！」

「ひっ……！！」

そう言っただけで彼女が眼前に突きだしてきたものに息を呑  
んだ。あまりに巨大すぎるそれに、花音は恐怖で震え上  
がってしまった。

だって、それは——ウズラの卵くらいの大きさだっ

たはずのそれは、前に動画で見たダチョウの卵くらいに  
膨れあがっている——

「む……むりい……」

ふえつと、半べその声が漏れた。

「そんなの……んっ……おなか……あうっ……はれつ  
……しちや……」

ぎゅるぎゅる

それを自覚してしまうと、少女の腸内は全力で抵抗を  
始める。

くぎゅるぎゅる

全力で、お腹の中の異物を排除しようと動き始める。

「だーめっ」

「んいっ……！！」

だけど、絵理衣はそれを許さなかった。

「まだ全部入っていないよー」

「あうっ……んぐっ……」

むりゅ、むりゅりゅつと肛門を内側からこじ開けて出  
て来ようとしたタマゴ——元のサイズよりも何倍も大  
きくなったもの——の頭を、膨張前の小さなタマゴで  
ぐつと押す。

「いう……っ！ あう……っ！ うああんっ！」

ぐりっ、ぐりっとなげやりねじ込み押し込むように、  
もう満員になってしまつて花音の腸内に詰め込んでい

く。

「ふう……っ……ふう……っ……あう……っ  
……あううう……っ……」

苦しげに喉が反り返り、荒い吐息が漏れた。

「だ……めっ……あうっ……だめっ……こわ……れ  
……あう……っ……ちや……んくうううっ……！！」

ぎゅつと嘔みしめた口もとから涎が溢れていった。

「や……っ……やあ……あつ……せん……せ……だ……  
めっ……だめっ……あつ……あああつ……！！」

ギョツと閉じた目元からは涙が零れ、可愛らしい鼻か  
らは鼻水までが垂れていった。

「んー……もつと奥に入れないと駄目ねえ」

ひとしぎりタマゴを詰め込んで、少女のアナルから飛  
び出そうとするタマゴの頭を押さえたまま、ふむ……な  
んて考えを巡らせる。

「そうだ……♪」

そして何か思い付いたのだろう——きつと碌でもな  
いことだ——視線は花音に向けたまま、空いている左  
手だけを背後に手を伸ばして、二度、三度と空振りして  
からお目当ての鞆を捕まえて——

「じゃーん♪」

「ひいっ！」

取り出したのはゴム製の、花音の肘から先ほどの長さ  
のある器具。いわゆるアナルプラグというものだった。

「や……やだっ……やあ……っ……！！」

それをどうしようとしているのか瞬時に理解して、花  
音は悲鳴をあげた。











ぬぼんっ ぬぼんっ ぬぼんっ

一気にみつつのタマゴが少女のアナルから産み落とされ  
た。

「Fuuuuuuuu!」

その強烈な刺激、行きすぎた快楽に花音はあつという間に  
絶頂に導かれてしまう。

「あは♪ すごいすごい♪ みつつも一度に産まれたわ♪」

「は……………あつ……………ああつ……………あう……………あううう

……………あうううう……………」

「でも、まだまだたくさん残ってるわよね？」

「あ……………う……………あ……………は……………い……………」

怖い。大好きなせんせーの音が、顔が、雰囲気、空気が  
だけと同時にぞくぞくする、身体が芯から震える、お腹の  
奥がキュンキュンする。

みちみちに詰め込まれたタマゴがお腹の中でうずうずし  
て、早く、早く産んでと少女を急かしていく。

「じゃあ、見せて♪」

「あ……………つつ！ また……………つつ！ うみつ……………ますつつ！」

ぬぼんっ ぼんんっ ぼんんっ

「は……………つつ！ うつつ……………！ うう……………つつ！ あ……………つつ！」

また絶頂してしまった。

「ふふ……………二個♪ あとはあ……………いち、に、さん……………多分、  
五個？」

それなのにまだ五個も残っているとわかれて、絶望感が心  
を支配していく。

でも、同時に胸がかあつと熱くなるのを、花音は止める  
事が出来なかった。

もう許して欲しいと思いつつ、この痺れるような快楽を  
もつともつと感じたいと思っている自分がいることを理解し  
て、花音は恐ろしくなつてしまった。

「ふふ……………じゃあ、産んじゃおう♪ 残りも……………ね？」

「は……………い……………」

ごくんと唾を飲み込む。その音が想像以上に響いて驚い  
てしまう。

「ほら、お腹力入れて、んーつていきんで、がんばれ♪ が  
んばれ♪」

「んっ……………んーっ、んうーっ……………」

奥の奥、S状結腸をぐぐり抜け下行結腸にまで到達してい  
るタマゴは、いきんでみてもなかなか降りてこない。

「んうっ……………んううっ……………んくっ……………くううんっ……………ん  
くううううっ……………」

それでもなお、花音はぐつと息を詰めて、ぎゅううつと目  
を閉じて、奥歯を噛みしめながらお腹に力を入れて――

「んひっつー！」

利那、凄まじい快楽が背筋を走り抜けた。それはタマゴが  
S状結腸を通り抜ける感覚だったが、そんなことは彼女に理  
解出来るわけもなかった。

ただ、その代わり、彼女が自覚できたのは――

「~~~~~」

そのままの勢いで肛門を押し開けて産み落とされるタマゴ

の感覚。

ぶぼんっ ぶぼんっ ぼんんっ ぼんんっ ぼんんっ

その刺激に、頭の中で光が弾けた。神経が焼き切れてしま  
うんじゃないかって思ってしまうほどの、とんでもない快楽  
だった。

「あ……………ひ……………ひあ……………んっ……………んう……………ああああ

「わあ、四つ出たね。それじゃあ、あとは一個……………」

頭がくらくらしていた。光はずつと頭の中で弾けつばなし  
で、もう、今すぐにでも崩れ落ちてしまおうと思った。

「すごいね、花音ちゃん。先生は本当に頑張り屋さんだね。先生、  
花音ちゃんが全部のタマゴを産めるとは考えてなかったわ。

ほんと、すごい」

だけど、その笑顔を向けられると、出来ない。意識を手放  
すなんて出来ない。

せんせーが褒めてくれた、せんせーがすごいって言うてく  
れた。

「だったら。だったら――」

「んっ……………」

お腹に力を入れる。

「んくっ……………」

お尻の穴に意識を集中する。

「ふっ……………んっ……………くうんっ……………む

ひくっ、ひくっとお尻の穴が震えている。いっぱい、いっ  
ぱい腸液を垂らしながらいやらしくくぱくぱと開いたり閉じ  
たりしている。アソコからいっばいえつちなオツユが溢れ



て、床を、産み落としたタマゴをねつとりと濡らしていて。

「あ……うっ……でない……よお……」

「だけど、あとひとつ入っているはずのタマゴは、どうやって出て来なかった。」

「んくっ……くんっ……でてこないよお……」

身体を折り曲げてお尻を突き出して、限界まで息を詰めてみても、奥の奥に入っているタマゴはぴくりともしないまま、花音に重量感を与えていた。

「ふえ……ふえええ……」

泣いてしまった。

「あうっ……ぐすっ……産めないよお……」

辛いのか、悲しいのか、気持ち良すぎるのか、何が何だかわからなかったけど、とにかく花音は湧き出てくる鳴咽を、涙を抑えることが出来なかった。

「くすっ……どうして泣くの？」

そんな花音にそつと歩み寄り、後ろから包みこむように抱きつく絵理衣。

随分と小さくなったものの、まだぼっこりと脹らんだお腹を優しく、優しくなで、なで、なでと撫で回して。

「だって……あうっ……だって……でない……ぐすっ……タマゴ……あうっ……産めない……」

「泣かないで。花音ちゃんが泣いてたら、先生まで悲しくなっちゃう」

そう言いつつも、絵理衣の顔に浮かんでいるのは笑顔だった。

「先生が手伝ってあげるから。ね……？」

優しく、優しく語りかけながら、その口もとは吊り上がり、

楽しくて楽しくてたまらないといった様子だった。

「ぐすっ……せんせえ……」

「それじゃあ、ベッドに行きましようか」

そのまま小さな花音の身体を抱き上げ、そつとベッドに下ろす。

「あ……あの……せんせ……？」

「どうしたの？ 花音ちゃん」

「えつと……その……縄、解いて……」

縛られたまま、高々とお尻を突き出した姿勢でうつ伏せにされた花音は、不安げに問いかける。

「ふふ、ごめんね。もうちょっと我慢してね。この姿勢の方がやりやすいから」

「え……？」

「ただ、絵理衣はそんな花音にくすつと笑いかけ、そして——」

ゴッ

「うあつっ！」

その瞬間、花音はお尻の穴を何か硬いモノで無理やりに押し上げられた。

「んぎゅっ……！」

そして、首に何かを引っかけられ、後ろに強く引かれる感覚。

「あつ……はっ……！」

その強い力に一瞬呼吸が苦しくなり、ぼくぼくと大きく口を開閉した。

「苦しい？ 多分、調整したから大丈夫だと思うんだけど」

「は……あつ……ああつ……んあつ……せんせ……なに……？」

「うん、大丈夫そうね。でも、あんまり暴れちゃダメよ。尿管が締まっちゃうかも知れないし、お尻がめくれ上がっちゃうかも知れないから」

「きか……え……？ おし……？」

自分の身体に何が起こっているのか分からなくて、パニック寸前で身を固くする花音。

「くすっ……大丈夫、暴れなかつたら大丈夫だからね。花音ちゃんのお尻の穴を上の方に押し上げて、首のところで固定しているだけだから」

「え……？ え……？」

「わからない。何を言っているのかわからない。だけど、ですけどせんせーは暴れちゃダメって言っていて——」

「は……あ……ああ……ああ……」

「ふふ、いい子」

褒められて、少し嬉しかった。

「だから花音ちゃんのこと大好き」

好きって言われて、胸が温かくなった。

「もうちょっと我慢してね、今、二股のアナルフックで花音ちゃんのお尻の穴を引っ張り上げてるから」

「いっ！ うんっっ！」

「だけど、更にお尻の穴を硬いモノで押し上げられて、反射的に身を固くしてしまう。」

「はい、大丈夫だからねー。今、花音ちゃんのお尻の穴をアナルフックと肛門鏡で押し上げてただけだから。全然怖い

事なんてないのよ」

「や……やあ……」

散々弄くりまわされ詰め込まれ、引つ張り出されたお尻の中だったけど、直に覗かれていると、やはり羞恥の感情が湧いた。

「み、みないで……」

「でも、見ないと最後のタマゴ、どこにあるかわからないから」

「う……あ……あう……」

そう言われるともう、大人しくするしかない。恥ずかしくて顔から火が出て死んでしまえばいいけど、そんなことを考えたところで身動きもまともに取れないこの状況では、花音にはどうすることも出来なかった。

「んー、綺麗……花音ちゃんの前腸、本当に綺麗ねえ」

うっとりとした様な絵理衣の声。

「ピンク色でひくん、ひくんつてしてて、ねっとり濡れててえつちなあ……すぐくえつち。いつまでも見ていたい気分」

「あ……あの……せんせ……んくつ……タマゴ……どう……ですか……?」

「ああ、ごめんさい。あんまり綺麗だから見惚れちゃった」

「あんまり……見ないで……」

「でも、見ないとタマゴ、産ませてあげられないから」

「ううっ……む」

恥ずかしい。恥ずかしい。本当に、泣きたい程に恥ずかしい。大好きなせんせーにお尻の穴を思いっきり掘げられて、中をまじまじと観察されて、花音は本当に、このまま消えてしまいたいと思っただけで——同時に、ゾクゾクと背中が震え、頭の中がじいんと痺れてしまうような感覚があった。

「んー、どこかなあ」

「あつ……！ んっ……!」

「おく……かなあ……」

「ひっ……んひっ……!」

その状態で、器具で更にお尻の穴を押し掘げられる。ぐいつ、ぐいつと縁を引っぱられたかと思っただら、ぐりんつ、ぐりんつと動かされて、びくんつ、びくんつと身体が震えてしまう。

「あー、S状結腸の奥……下行結腸の辺りにひっかかっちゃってるのね」

しばらくの間その羞恥に耐えていると、なるほど、とかいながら絵理衣が呟いた。

「うーん、これは手をつ突っ込んだ方が早いかも……」

「え……?」

そして次の瞬間聞こえた声に、花音は頭がフリーズしてしまっただけ。

手を……突っ込む……? どこに……?

「せ、せんせ……あの……」

「うん……肛門に……弛緩剤を打って……」

「せ、せんせええ！ せんせええ！ な、なにするんですか……?」

「大丈夫よ」

花音の疑問に絵理衣ははっきりとは答えずに、ただ一言そう言った。

「何も怖い事なんてないからね」

「えっ、で、でもっ、でもっ……」

聞こえる言葉の全てが不穏で、不安で、怖い。

怖くてたまらない。

「とりあえず注射打つね。ちよつと痛いかも知れないけど我慢してね」

「ちゅ、注射!？」

「どこに? どこに……? 待って……待って……!」

「暴れちゃだめよー」

ぐつとお尻を押しえつけられた。

「手元狂っちゃったら危ないからね」

「ひ……」

あ、危ない！ やっぱ危ないって！ 怖い！ 怖い怖い！！

「それじゃあ、打つわね……ちよつとちくつてするよー」

「んっ……くっ……うううっ……」

つぶんと針の刺さる感覚。お尻の穴の縁にずぶぶつと沈み込んでくる鋭いなか。

「いっ……うっ……あつ……い……た……っ……!」

そして、ずきんつと疼く様な痛み。

「だけど——」

「あつ!」

次に花音に襲いかかったのは、痛みとは違うもの。

「あつ! ああつ! あつ! おしり……っ! あうっ……!」

「うら……っ! がえ……っ!」

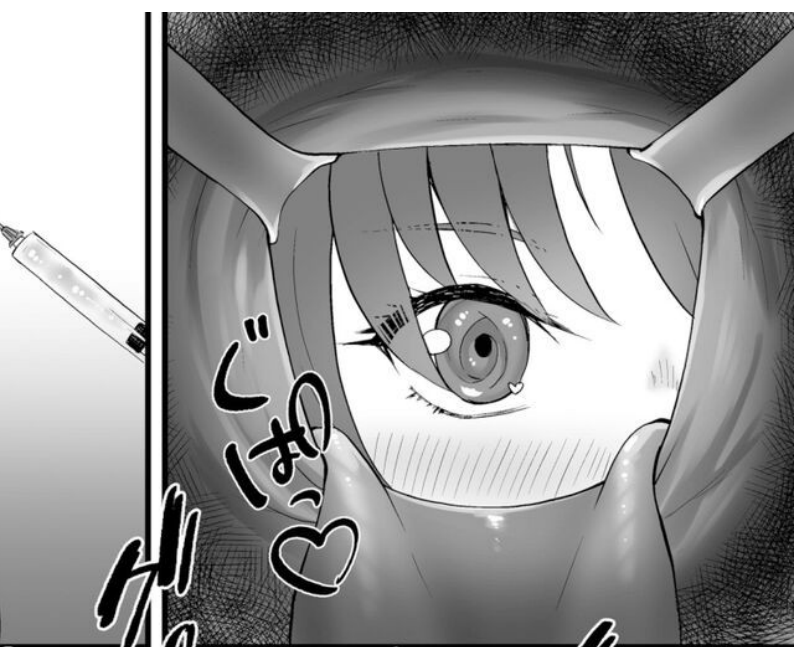
身体が内側から開いていく。お尻の穴の感覚が無くなって、どこまでも、どこまでも開いていく。

「いや……あ……っ! いやっ……やあ……っ……やだあ……」

「うふ……可愛いなあ。ひとりで開いていっちゃう花音ちゃ……」







しちやったみたいだし……今日はこれでお開きかしら」

「そういいつつアナルフックの先端に軟膏のようなものを塗りつけ、飛び出した直腸の先端、結腸口に挿入して、一緒にゆるりと押し込んで。」

「あはっ、花音ちゃん、お尻、大好きになっちゃったかも♪」

「一瞬びくんつと跳ねた花音の様子を満足げに見つめ、くすりと微笑むと、なで、なでつと優しく、愛おしく頭を撫でてやるのだった。」

終

チャームポイントは  
カワイイ笑顔と  
左目の下の特徴的な二重泣きぼくろ。

# くらはし かのん 倉橋 花音

2月28日生まれ 1X歳

身長132cm / 体重 29kg

私立陽葵ヶ丘女子学園〇等部1年生

私立の名門お嬢様学校に通っているけれど、本人はいたって庶民。  
クラスで(というが学校で)一番のちびっこ。

しなやかな筋肉の持ち主で、運動神経はかなりいい。

勉強も決して要領のいいタイプではないが、

地頭がよく頑張り屋さんなのでそこそこ上位。

明るく朗らか、心優しい女の子。  
いつもにこにこを心がけている。

本人は気づいていないが、  
周囲の男女問わず魅了してしまう  
不思議なオーラが出ている。

バスケ部所属。

体格ではもの凄く不利だけど、

持ち前のスピードとジャンプ力で

1年生ながらチームのエース。

保健室の先生♀とヒミツのお付き合いをしている。



「花音ちゃんとお尻遊び」

発行日 二〇二三年五月五日

発行 不可思議

印刷 大陽出版株式会社

文 玉沢円

イラスト 双木こじろ

デザイン 双木こじろ

編集 玉沢円

fukashigi@mac.com (e-mail)  
@tamasawatubura (Twitter)

Fantia

pixivFANBOX





不  
思  
不  
忘  
FUKASHIGI  
心  
儀



© 2018 FURUSHIKI. All rights reserved.

不可思議

不可思議  
FURUSHIKI

DOJIN  
R18  
成人向け